

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

——購買行動の変化の背景及び生活の質の実態——

幾石 致夫

目次

- 1 中産階級のしあわせ感と満足感とは何か
 - (1) 現在のしあわせ感と満足感について
 - (2) 未来への期待
- 2 生活の質から見たしあわせの条件とは何か
 - (1) 重視する生活項目とそうでない項目
 - (2) 生活の質の因子別傾向
 - (3) 生活の質の対策別傾向
- 3 中産階層における生活の質と生活文化の関連性

前々号および前号において「生活の質」の概念規定ならびに「生活の質」と購買行動の関係を文献、アンケート調査結果等により検討したわけであるが本号ではしめくりとして、さいぎんの主婦の購買行動の背景となっている「生活の質」そのものを生活実態（感）の視点より分析・検討することにする。それは階層意識、満足感、しあわせ感あるいは現在の暮し向きへの認識といった「生活の質」そのものを構成する諸々のファクター同士の間の相関性、あるいはそれらの属性との間の関連性をいささかサイコロジカルになるかも知れないが、分析、解明しようとするものである。

1 中産階級のしあわみ感と満足感とは何か

- (1) 現在のしあわせ感と満足感について

今回の調査では調査対象者の28%が「非常にしあわせ」としており、62%が

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

「まあしあわせ」と答えている。合せて90%が自分はしあわせな生活を送っているとしているわけだ。これは正に驚異である。総理府が行なった全国調査「社会意識調査」（昭和46年3月）では63%がしあわせだとしているのに比べれば、今回の調査ではかなりの高さを示している。（もっとも総理府の調査が今回の調査時期とは大分ずれており、しかも母集団が全国男女であり、異なることもあるが）

もう一つ、過去との比較で、しあわせ感が高くなっているのだということである。低成長経済とはいっても、過去の高度成長経済期に不動産（土地、家屋）を購入しそれらの資産が見掛けではあるが、心理的に貨幣価値の下落によりプラス価値をもたらしているというしあわせ感である。つまりインフレによる見掛けの価値増加を低成長経済のいま獲得したという自己満足的なしあわせ感といえるのかも知れない（心理的に）。

今回の調査では満足感もしあわせ感と同時に高い数値を示していることである。

ここで注意すべきは他人と比較すれば相対的に余り満足とはいえないが、しかし自分だけの生活の中に閉じ籠もればけっこうしあわせと満足感に浸ることができるのだということをこのことは語っているのかも知れない。

一方しあわせと満足感は当然予想されることができ、その相関性は高いということである（第1表参照）。たとえば今の暮しむきに満足を感じているものの8割が非常にしあわせであるとしている。

第1表 暮しむき満足としあわせ

(%)

		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
今む のき 暮に し	満 足	80	20	—	—
	ま ぁ 満 足	16	82	2	—
	ど ち ら で ない	2	64	33	—
	不 満	2	50	30	18
平 均		28	62	8	2

つぎに収入と満足感の相関性を見ることにした（第2表参照）。

年収400万円以下では満足と答えているものは少ない。

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第2表 世帯収入としあわせ

(%)

	非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
1,000万円以上	33	61	5	1
900 "	33	63	4	—
800 "	24	61	12	3
700 "	30	66	4	—
600 "	30	59	7	5
500 "	32	57	9	2
400 "	17	67	13	3
300万円以下	27	63	7	3
平 均	28	62	8	2

第3表 世帯収入と満足感

(%)

	満 足	ま あ 満 足	どちらでもない	不 満
1,000万円以上	33	58	6	3
700 "	38	42	21	—
800 "	21	64	9	6
700 "	26	60	6	9
600 "	19	57	8	16
500 "	22	52	6	20
400 "	18	42	15	25
300万円以下	16	58	11	15
平 均	23	54	10	13

第2表、第3表より見ると、800万円層が特異な傾向を示していることである。

すなわちこの層は全国で見ると2倍の収入であるにも拘らず満足度がかなり落ち込んでいることである。これは3つの仮説を考えることができる。その第1はこの層だと家族関係から教育支出が相対的に多いこと、第2は共稼ぎでようやくこの水準を維持していること、第3は企業のサラリーマンでいうと課長から部長への、あるいは部長から役員への過渡期の段階であり、いずれにしてもライフサイクルの曲り角に差しかかり一休みということであり、傍から見るほど本人にと

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第4表 相対的暮しむき判断としあわせ感 (%)

		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
近比 所と べて	豊か	48	49	1	1
	ふっ	28	67	8	1
	貧しい	10	50	28	12
平均		28	62	8	2

第5表 所属階層としあわせ感 (%)

		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
上		39	56	6	—
中の上		34	61	5	—
中の中		25	67	7	2
中の下		25	61	9	5
下		18	47	28	6
平均		28	62	8	2

っては収入にふさわしいほど優雅な生活をしているのではないであろうという3大仮説である。

そのために、この層にあっては生活は活発性を欠くと同時にしあわせ感も、満足感も低位にあるのではないかと考えられる。このことは我孫子市の主婦の消費行動調査でもはからずも同様の傾向を見ることができた。ということはこの800万円層の一般的傾向のようにも受けとれる。

それでは相対的なくらしむき判断はどうなるであろうか。すなわち近所と比較してのしあわせ感あるいは満足度である（第4表参照）。

第4表によってわかるのは相対的な満足感としあわせ感には強い相関を見ることができるということである。すなわち、近所の人と比較して自分の方が相対的にしあわせであると感じている場合は同じく自分は近所の人よりは生活に満足していると答えており、逆に自分を近所の人よりふしあわせであると見る人は満足感近所の人よりも少なくなってくる。

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

同じく主観的に判断したところの階層意識としあわせ感の相関性もかなり強い
 ということができる（第5表参照）。

（過去との比較でのしあわせ感）

それでは時間経過という観点に立って、しあわせ感の維持を見てみよう。具体的には5年前と比べてしあわせになったかどうかということである。

第6表 5年前と比べてのしあわせと今のしあわせ (%)

		現 在			
		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
5 年 前 と く ら べ て	しあわせになった	56	44	1	—
	まあしあわせになった	20	77	2	1
	どちらでもない	15	67	17	1
	ふしあわせになった	4	38	31	27
平 均		28	62	8	2

第6表に見られるように5年前と比べて、しあわせになった程度の高いものほど現在しあわせであると認識しているものが多いことである。また5年前に比べて自分はふしあわせになったと思っている人の6割弱は現在のしあわせについて「どちらでもない」あるいは「ふしあわせ」であるとしている。以上のことから時間的トレンドが現在のしあわせ感をかなり規定していることがわかる。

つぎに第7表によって5年前との相対比のしあわせ感と年齢との相関を見ることにしよう（第7表参照）。

つぎに所属階層意識としあわせ感のクロスだが、その関係は第8表の通りである。

同表によると、中の上層に「しあわせになった」と答えているものが多く、中の下、下の階層では「どちらでもない」あるいは「ふしあわせ」になったと答えているものが多い。

上のデータはさまざまな解釈ができようか、ここではつぎのごとく解釈すること

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第7表 年齢別にみたしあわせ感の推移

(%)

	5年前とくらべて			
	非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
29歳以下	27	31	38	4
30～34歳	33	26	31	10
35～39歳	27	45	23	5
40～44歳	23	39	33	5
45～49歳	31	24	41	4
50～54歳	23	33	39	5
55～59歳	39	39	17	6
60歳以上	16	37	42	5
全体	11	56	27	6

第8表 階層別にみたしあわせ感の増大

(%)

	しあわせになった	まあしあわせになった	どちらでもない	ふしあわせになった
上	27	50	22	—
中の上	32	32	30	6
中の中	29	41	27	3
中の下	26	24	41	9
下	19	25	41	16
全体	29	34	32	6

とにしよう。

上の階層は高度成長経済期にかなりしあわせを享受しており、その結果として現在の地位を得たのであろうと推察されるが、低成長経済期に入って享受することが少なくなり、その結果、5年前に比較してまあしあわせであると答えているものが多くなっているのであろうと考えることができる。いわば社会心理学的表現を借りれば相対的喪失感とでも表現することができよう。中の上の層ではこの相対的喪失感が稍少なく、そのためにしあわせになったと答えており、中の下および下の層の人達は現実に生活水準の低下こそあれ上昇がなかったためにしあわ

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

せになったとは感じられないのであろう。

(2) 未来への期待

時間軸を将来に向けたとき、しあわせ感はどう変るであろうか。

第9表 5年後と5年前のくらし

(%)

5年後には	実数	%	5年前とくらべて	実数	%
非にしあわせになっていると思う	50	11.3	しあわせになった	126	28.5
まあしあわせになっていると思う	247	55.8	まあしあわせになった	149	33.7
どちらでもない	117	26.4	どちらでもない	141	31.9
ややふしあわせになっているかもしれない	26	5.9	ややふしあわせになった	20	4.5
非常にふしあわせになっているだろう	3	0.7	非常にふしあせになった	6	1.4
計	443	100.0	計	442	100.0

第9表によると期待値（5年後）と実現値（5年前）の関係であるが、「非常に」＋「まあ」では、前者では、67.1%，後者で62.2%とそれ程の差はないが、「非常に」ということになると前者は11.3%であるのに対して後者は28.5%とかなり高い。

このことは、中産階級の人々は未来に対してあまり期待していないことを物語っているのではあるまいか。

第10表を見ると現在しあわせである人ほど5年後の時点でもしあわせを多く期待しており、現在ふしあわせな人ほど将来もふしあわせになるであろうと推測しているのが分る。

つぎに満足度と5年後のしあわせの相関を第11表で見ることにしよう。ここでも相関度が高いことを示している。また第12表は5年前と比べての現在のしあわ

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第10表 今のしあわせと5年後のしあわせ (%)

		5 年 後 に			
		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
今	非常にしあわせ	27	59	14	—
	まあしあわせ	6	58	28	8
	どちらでもない	—	38	57	5
	ふしあわせ	—	30	30	40
平 均		11	56	27	6

第11表 満足度と5年後のしあわせ (%)

		5 年 後 に			
		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
満 足		28	58	14	1
まあ満足		8	60	28	5
どちらでもない		—	42	42	16
不 満 足		4	48	32	16
平 均		11	56	27	6

第12表 5年前と5年後のしあわせ感 (%)

		5 年 後 に			
		非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
5 比 年前と	非常にしあわせ	27	59	11	3
	まあしあわせ	7	71	18	4
	どちらでもない	4	41	48	8
	ふしあわせ	—	38	31	31
平 均		11	56	27	6

せ感と5年後期待されるであろうしあわせ感をクロスさせたものであるが、こ
でも高い相関を読みとることができる。

さて以上のことを取りまとめて見ると、つぎのようにいうことができよう。

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

社会心理学的にいうとピクマリオン効果である。すなわち、自分の成績が実際よりよいと信じ込まされた生徒は実際にもよい成績をとるという事実（法則）がある。このことはしあわせ感についてもいえるであろうということである。

第13表 暮らしむき判断によるしあわせの見通し (％)

	5 年 後 に			
	非常にしあわせ	ましあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
豊 か	14	66	18	2
ふ つ う	11	55	28	6
貧 し い	8	38	35	20
平 均	11	56	27	6

2 生活の質から見たしあわせの条件とは何か

しあわせになるための条件を社会的側面に視点をおいて以下しばらく検討することにしよう。生活の質的内容としては、国民生活審議会の「国民生活選好度調査」（昭和55年3月）の調査項目の中から各生活領域にあわせて、22項目（第14表参照）をとりあげ、それぞれの項目について「非常に重要」から「全然重要でない」までの5段階尺度を設けて、その条件を以下検討して見た。

（重視する生活項目とそうでない項目）

22の生活項目の中で「重視する」（「非常に重要」＋「やや重要」）と答えている割合が70％を超ゆるものは16項目である。そのうち重要度の比重が90％以上のものは「病気になっても適切な診断や治療が必要なときいつでも受けられること」、「親子の間に互に信頼があること」、「物価の上昇によって収入や財産が目減りしないこと」、「地震・台風などへの防災対策を国がしっかりすること」、「収入が年々確実に増えること」、「体力の維持や増強につとめること」の6項目であり、中でも前2項目は「非常に重要である」とする回答が80％を超えている。

これに対して「重要である」とする回答が少なかったのは「祭、盆踊り、運動

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第14表 生活の質の内容

	生 活 内 容	項 目 名
a	親子の間に互いの信頼があること	親子の信頼
b	夜安心して近所の道を歩けること	犯罪防止
c	国民宿舎、国民休暇村など公共の宿泊施設が整備されていること	公共宿泊施設
d	地震・台風などへの防災対策を国がしっかりすること	災害対策
e	収入が年々確実に増えること	年収の増加
f	やりがいのある仕事ができること	仕事のやりがい
g	病気になっても適切な診断や治療が必要なときいつでも受けられること	必要な診断・治療
h	物価の上昇によって収入や財産が目盛りしないこと	物価の抑制
i	スポーツクラブや趣味の会に気軽にはいれて指導をもらえること	クラブ入会
j	ゴミや下水が衛生的に処理されること	ゴミ・下水処理
k	公害対策について行政がしっかりやること	公害対策
l	失業の不安がなく働けること	雇用の安定
m	体力の維持や増強に努めること	体力の維持・増強
n	生涯を通じて教養を高め趣味を広げられること	趣味・教養
o	企業が欠陥商品を出さないよう責任をもつこと	企業の責任
p	月々かなりの貯蓄ができること	十分な貯蓄
q	文化遺産や史跡が大事にされること	文化遺産・史跡
r	旅行やスポーツや催物などに関する必要な情報がいつでも得られること	余暇情報
s	祭、盆踊り、運動会など自分が住んでいる地域の行事が盛んなこと	地域行事
t	能力のある人が学歴が低いことで差をつけられないこと	学歴格差
u	大学教育を意欲のある人は誰でも受けられること	大学教育の開放
v	寝たりき老人や心身障害者・障害児がいる家族のための福祉サービスが充実していること	福祉サービス

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第15表 収入階層別にみたしあわせの見通し

(%)

	5 年 後 に			
	非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
1,000万円以上	6	68	24	3
900万円台	13	42	38	8
800 "	9	55	36	—
700 "	21	53	17	9
600 "	19	50	19	11
500 "	9	63	20	7
400 "	7	55	30	8
300 "	11	57	26	6
平 均	11	56	27	6

会など自分が住んでいる地域の行事が盛んなこと」(21%)、「旅行やスポーツなど催物に関する必要な情報がいつでも得られること」(32%)、「スポーツクラブや趣味の会に気軽に入れて指導してもらえること」(49%)などである。

以上見てきたように今回の調査によると、生活の質の向上にとって重要度の高いと目される項目はいずれもわれわれの生活に直接係るところの領域（「健康」「所得・消費」,「生活環境」,「家族」）の項目であり、これに対して重要度の余り高くないのは「余暇」の領域に係るものであった。

このことは現在大きく叫ばれている余暇の重要性は現実には生活の基盤が確立された上のものであることが推察されるのである。

それでは「非常に重要」の回答が高率であった項目について属性との関連を示すと第(17)(18)表のごとくである。この関係の特徴的にまとめると以下のとおりである。

①健康面の配慮項目……・中・高年層

②親子の関係項目……

- ・ 40歳前半と50歳後半
- ・ 夫婦と小学生家族
- ・ 主人の職業が管理・事務

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

- ③ 職業所得・消費項目……（物価抑制）
- ・ 60歳以上
 - ・ 主人無職
 - ・ 収入 800 万円台
- ④ 年収増加項目……
- ・ 20, 30歳台
 - ・ 主人職業では労務, 事務職
 - ・ 収入 500 万円台

以上は生活の質の向上に関して個人の生活項目の重要度を種々な角度より検討してきたわけだが、つぎにこれらの生活項目について、最重要なものについて検討するとつぎのようになる。

第1位 「親子関係の信頼」(61%)

第2位 「必要な診断・治療」(40%)

第3位 「年収の増加」(31%)

(マルチ調査)

以上3大重要項目について年齢, 学歴, 主人職業, 世帯収入との相関を見たのが第17表である。ここでは第16表と同様の傾向を示している。

(生活の質の因子別傾向)

ここでは先にあげた国民生活審議会が行なった「国民生活選好度調査」(昭和55年3月)の中の77の生活領域の中から因子負荷量の高いものでその生活領域を代表させ、それと属性をクロスさせその相関性を検討することにしよう。

第16表 所属階層としあわせの見通し

(%)

	5 年 後 に			
	非常にしあわせ	まあしあわせ	どちらでもない	ふしあわせ
上	6	61	33	—
中の上	13	58	23	5
中の中	10	59	26	4
中の下	11	50	28	11
下	9	44	31	16
平均	11	56	27	6

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第17表 最も重要視する生活項目（上位3項目）

（単位：％）

社会的属性		順位	第 1 位	第 2 位	第 3 位
本人年齢	29歳以下		親子の信頼(60)	年収の増加 (46)	災害対策 (30)
	30～34歳		親子の信頼(66)	必要な診断・治療(43)	年収の増加 (30)
	35～39 "		親子の信頼(64)	年収の増加 (39)	必要な診断・治療(36)
	40～44 "		親子の信頼(66)	必要な診断・治療(38)	年収の増加 福祉サービス (28)
	45～49 "		親子の信頼(53)	必要な診断・治療(46)	年収の増加 (32)
	50～54 "		親子の信頼(54)	必要な診断・治療(37)	物価の抑制 (31)
	55～59 "		親子の信頼(63)	必要な診断・治療(54)	災害対策 物価の抑制 災害対策 物価の抑制 (31)
60歳以上		親子の信頼(63)	必要な診断・治療(47)	物価の抑制 (29)	
本人学歴	中学校卒		親子の信頼(50)	必要な診断・治療(38)	災害対策 体力の維持・増強 (31)
	高校卒		親子の信頼(60)	必要な診断・治療(43)	年収の増加 (33)
	短大卒		親子の信頼(66)	必要な診断・治療(39)	物価の抑制 (31)
	大学・大学院卒		親子の信頼(56)	必要な診断・治療(36)	年収の増加 (33)
	各種学校卒		親子の信頼(71)	体力の維持・増強(36)	年収の増加 (32)
主人職業	商工自営業		親子の信頼(53)	年収の増加 (40)	必要な診断・治療(34)
	自由業		親子の信頼(55)	仕事のやりがい (38)	必要な診断・治療(35) 体力の維持・増強
	管理的職業		親子の信頼(63)	必要な診断・治療(40)	年収の増加 (34)
	事務的職業		親子の信頼(60)	必要な診断・治療(34)	体力の維持・増強(29)
	労務職		親子の信頼 年収の増加 (44)	仕事のやりがい (33)	必要な診断・治療(32)
	無職		親子の信頼(60)	災害対策 (45)	物価の抑制 (40)
世帯収入	1,000万円以上		親子の信頼(63)	必要な診断・治療(45)	物価の抑制 (28)
	900万円台		親子の信頼(52)	仕事のやりがい (35)	物価の抑制 (30)
	800 "		親子の信頼(58)	必要な診断・治療(49)	物価の抑制 (33)
	700 "		親子の信頼(53)	必要な診断・治療(49)	災害対策 (31)
	600 "		親子の信頼(59)	必要な診断・治療(40)	年収の増加 (29)
	500 "		親子の信頼(64)	年収の増加 (33)	災害対策 必要な診断・治療(27)
	400 "		親子の信頼(66)	必要な診断・治療(40)	年収の増加 (38)
	300 "		親子の信頼(66)	必要な診断・治療(41)	年収の増加 (34)

第18表 「非常に重要」の比率が高い生活項目の社会的属性別結果

社会的属性 生活項目	本人年齢	本人学歴	主人職業	家族構成	世帯収入
必要な診断 ・治療	55～59歳(88%)	短大卒(85%)	無職(90%)	夫婦と老人(86%)	300万円台(84%)
	45～49歳(84%) 60歳以上(83%) 30～39歳(82%)	各種学校卒(83%) 高校卒(81%) 中学卒(80%)	事務的職業(88%)	夫婦と小学生(85%)	800万円台(84%) 600万円台(82%) 1,000万円以上(81%)
親子の信頼	40～44歳(86%)	短大卒(84%)	管理的職業(82%)	夫婦と小学生(90%)	600万円台(87%)
	55～59歳(86%) 30～34歳(80%)	各種学校卒(83%) 高校卒(81%)	事務的職業(81%)	夫婦と幼児(85%) 夫婦と老人(83%) 夫婦と老人と幼児(82%)	300万円台(86%) 800万円台(81%)
物価の抑制	60歳以上(90%)	短大卒(79%)	無職(91%)	夫婦と中学生(75%) 以上	800万円台(90%)
	35～39歳(77%) 50～54歳(77%) 45～49歳(76%)	各種学校卒(74%)	自由業(76%) 管理的職業(71%)		600万円台(75%) 500万円台(74%) 300万円台(70%)
災害対策	60歳以上(89%)	各種学校卒(78%)	無職(84%)	夫婦と老人(86%)	600万円台(71%)
	50～54歳(82%) 55～59歳(77%) 45～49歳(73%)	短大卒(72%) 大学・大学院卒(70%)	自由業(79%) 管理的職業(68%)	夫婦のみ(74%) 夫婦と中学生(69%) 夫婦と老人と小学生以上(69%) 小学生以上(69%)	1,000万円以上(71%) 300万円台(70%)
年収の増加	35～39歳(75%)	短大卒(71%)	労務職(78%)	夫婦と幼児(76%)	500万円台(73%)
	29歳以下(71%) 30～34歳(69%) 45～49歳(66%)	各種学校卒(70%)	事務的職業(71%) 無職(71%)	夫婦と中学生以上(69%) 夫婦と老人と幼児(69%)	300万円台(72%) 800万円台(72%) 600万円台(71%)

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

（第18表参照）。代表因子はつぎのとおりである。

	因子負荷量
余暇因子——「余暇情報」	0.7362
仕事因子——「雇用安定」	0.7165
安全因子——「災害対策」	0.6629
健康因子——「必要な診断・治療」	0.7080
教育因子——「大学教育の解放」	0.6862
消費因子——「年収の増加」	0.7022
公正因子——「学歴格差」	0.5471

①余暇因子（「旅行やスポーツや催物などに関する必要な情報がいつでも得られること」と属性との関係だが先に見た通り全体として「重要」度は非常に低くかったが、そういった流れの中で無職の60歳以上の高齢層、家族関係では「夫婦と老人」の世帯、世帯収入では300万円台と700万円台では余暇情報を「重要」としてものの割合が多いのが特徴的である。このことは前者にあっては余暇時間が多いこと、また300万円台では収入がすくないため有利な情報が必要であろうし、また700万円台ではいろいろな出費が多いため割安な余暇情報が必要となるのであろうというのがその理由とここでは考えられよう。

②仕事因子（「失業の不安がなく働けること」）は全体として重要度は高いが、中でも年齢では45～49歳、55～59歳、また主人の職業は事務職・自由業がその重要度が高い。低経済成長下の窓際族の深刻な姿を浮き彫りにしている。一方世帯収入では、300～400万円の低収入層に仕事因子を重要視する傾向が目立っているのも特徴的である。

③安全因子（「地震・台風などへの防災対策を国がしっかりやること」）では、どの層でもその重要度を高く評価しているが、とくに高年令層、家族関係では「夫婦と老人」世帯のライフ・ステージに高くなっている。

④健康因子（「病気になっても適切な診断や治療が必要なとき、いつでも受けられること」）については、常識的にも高い重要度が要求されるわけであるが、

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

今回の調査ではとくに「40～50歳台」，「夫婦と老人」，「夫婦と小学生」の世帯，また主人の職業が事務・無職層が他の階層より高率の重要度を示している。

⑤教育因子（「大学教育を意欲ある人は誰れでも受けられること」）では日本人学歴が大学を受験する資格のある「高校卒」あるいは「短大卒」の層にその重要度を主張するものが多い。また重要とする層としてはこれに加えて，主人職業では自由業，年齢的には50～59歳，40～44歳層に多い。

⑥消費因子（「収入が年々確実に増えること」）については，世帯収入では，300万円台，500～600万円台また主人職業では労務職，事務職が収入増を生活の質の向上の上で重要であるとしている。低成長経済下において当然であろう。

⑦公正因子（「能力がある人が学歴が低いことで差がつけられないこと」）では学歴が低い層で，労務職，自由業の人および年齢的には35～44歳，55～59歳に重要としている人々が多い。

なお，これら因子と階層意識，暮しむきとの相関を見ると，前者にあっては中の「下」また後者にあっては，「貧しい」，「普通」としているものに各因子について重要性を訴えているものが多い。

要するに自らを低階層ならびに暮し向きも必ずしもよくないと認識する層に，生活の向上をはかるためには，多くの生活項目（生活の質に関する）が重要であるとしてもものが多い。

（生活の質対策傾向）

この項目に関しては前々回にマクロ的に触れているが，今回は社会属性との関連でブレーク・ダウンして以下暫く検討することにしよう。

前記の22項目に関してその対策主体はどこにあるかという点に視角を描いてグルーピングするとつぎのごとくなる。

① 個人の対策に属するもの。〔親子の信頼，仕事のやり甲斐，体力の維持・増強，趣味・教養，十分な貯蓄〕

② 自治体の対策に属するもの。〔犯罪防止，公共宿泊施設，ゴミ・下水処理，公害対策，文化遺産・史蹟，地域行事〕

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

③ 国の対策に属するもの。〔災害対策，必要な診断・治療，物の抑制，学歴格差，大学教育の解放，福祉サービス〕

④ 企業の対策に属するもの。〔年収の増加，クラブ入会，雇用の安定，企業の責任，余暇情報〕

各々の生活項目をつぎのごとく視点配分し第1分位～第4分位化し，（1分位→4分位＝低→高）これを「属性」ならびに「現在のしあわせ感」「5年前と比較したしあわせ感」「5年後のしあわせ感」「階層意識」「暮し向きの評価」「生活文化度」との相関させたクロス結果は第19表ならびに第20表のとおりである。

（得点配分は「非常に重要」＝3点，「やや重要」＝2点，「どちらでもない」「さほど重要でない」「全然重要でない」＝1点とする）

① 個人の努力に係る生活項目

個人の努力に係る生活項目は3分位でその結果を見ると，全体として「3分位」が多い。生活実感，属性との関係から見ると，分位の高いのは本人年齢では40～44歳，高学歴，主人の職業は専門的職業，管理的職業，生活文化度の高い層であり，意識の面では，暮し向きが「貧しい」と認識している層といえる。

② 自治体の対策に係わる生活項目

この項目は4分位を見ているが，全体として3分位のものが多く，本人年齢45～49歳，50～55歳層で学歴は各種学校卒で主人の職業が自由業，無職，収入は300万台と800万以上と2極分化しているのが特徴的である。同時に生活文化度は高く，階層意識も中の「上」で，「暮し向き」も豊かと感じている層である。これが4分位となると，収入は500万円台，階層意識の下は「下」「暮し向き」の自己認識は「貧」であり，「生活文化度」は低い層の比率が高くなっているのが特徴的である。

③ 国の対策に係る生活項目

この生活項目は①の個人の努力に係る生活項目の場合と同様に得点分布は②の自治体の対策に係る生活項目の場合と異なり，極めて正規分布とは離れておいた関係，一方を切りすてる分位で検討することにした。

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第19表 社会的属性からみた生活の質対策別傾向

属性 分位	本人年齢	本人学歴	主人職業	家族構成	世帯年収
個人	1 60歳以上 55～59歳	中学卒	無職 商工自営業	夫婦と老人と幼児 夫婦のみ	1,000万円以上 600万円台
	2 60歳以上	高校卒	労務職 商工自営業	夫婦と幼児 夫婦のみ	800～900万円台
	3 40～44歳	短大卒 大学・大学院卒	専門的職業 自由業・管理 的職業	夫婦と小学生 夫婦と老人と小学 生以上	400万円台 600～700万円台
自治 体	1 60歳以上	大学・大学院卒 中学卒	無職	夫婦と老人と幼児	1,000万円以上 500万円台 800万円台
	2 30～34歳	中学卒	労務職 専門的職業	夫婦と老人 夫婦と小学生	700万円台 900万円台
	3 55～59歳 45～49歳	各種学校卒	無職 自由業	夫婦のみ 夫婦と老人と小学 生以上	1,000万円以上 800万円台 300万円台
	4 50～54歳	短大卒	労務職 商工自営業	夫婦と老人	500万円台
国	1 45～49歳	大学・大学院卒	商工自営業	夫婦と老人と幼児	900～1,000万円台
	2 29歳以下	中学卒	無職 労務職	夫婦と幼児 夫婦と老人	900万円台
	3 45～54歳 35～39歳	高校・短大卒	事務的職業 自由業	夫婦と小学生	400～500万円台
企 業	1 60歳以上	中学卒	無職	夫婦のみ	1,000万円台以上
	2 30～34歳	中学卒	労務職 管理的職業	夫婦と老人	900万円台
	3 35～39歳 29歳以下	高校・短大卒 大学・大学院卒	事務的職業 専門的職業	夫婦と幼児	300万円台 500万円台
	4 45～54歳	各種学校卒	専門的職業 事務的職業	夫婦と老人 夫婦と中学生以上	700万円台

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第20表 生活実感からみた生活の質対策別傾向

（単位：％）

生活実感		対策別分位			個 人				自 活 体				国			企 業			
		1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4				
現在のしあわせ感	非常にしあわせ	7	30	63	15	22	53	10	11	43	47	10	36	46	8				
	まあしあわせ	11	34	55	16	22	51	12	15	32	54	13	33	43	11				
	どちらともいえない	5	38	57	11	27	46	16	8	30	62	5	27	62	5				
	ふしあわせ	20	30	50	20	30	50	—	30	30	40	20	30	50	—				
5年前と比較した	しあわせになった	10	27	63	17	22	48	13	14	35	51	17	26	46	11				
	まあしあわせになった	10	32	58	15	22	52	11	13	35	52	9	38	43	10				
	どちらともいえない	9	41	50	14	23	53	11	14	36	51	12	32	47	9				
	ふしあわせになった	12	27	62	15	31	46	8	12	27	62	8	42	46	4				
5年後のしあわせ感	非常にしあわせになっている	8	28	64	12	18	60	10	12	36	52	14	30	44	12				
	まあしあわせになっている	10	31	60	17	24	48	11	15	36	49	12	35	43	10				
	どちらともいえない	9	39	52	12	22	52	14	9	34	56	10	28	53	9				
	ふしあわせになっている	17	38	45	17	24	52	7	24	21	55	14	38	41	7				
中流意識	中の上	10	33	57	18	20	52	9	16	38	46	13	37	40	11				
	中の中	8	35	57	12	28	50	10	11	35	55	12	32	47	9				
	中の下	12	29	59	17	21	48	14	14	32	54	11	31	50	9				
暮らし評価	豊か	9	39	52	14	22	58	5	16	38	46	10	48	36	6				
	普通	11	31	58	16	24	49	12	13	34	54	12	29	49	10				
	貧しい	5	32	63	12	20	51	17	12	37	51	7	32	46	15				
生活文化分位	1 分位	16	32	53	11	32	42	16	5	32	63	11	42	32	16				
	2 分位	9	34	57	11	26	47	16	13	28	59	11	32	46	10				
	3 分位	11	36	53	20	19	51	10	17	40	43	15	33	42	9				
	4 分位	2	27	71	11	18	57	14	7	32	61	5	30	48	16				

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第20表で分るとおり、全体の傾向として3分位が最も多い。これを属性および生活実感別には、1分位では本人年齢45～49歳、学歴では「大学・大学院」卒、収入は900万円以上、従って暮らし向きは「豊か」で、「階層意識」は中の「上」であるのに対して、3分位では、学歴は「高校・短大」卒、収入は「400万円～500万円台」、「階層意識」は中の「中」～「下」であり、暮らし向きは「普通」と認識しているものが多い。

④ 企業の責任に係る生活項目

ここでは4分位に分類して結果を見ると、全体の傾向として3分位が高い。この分位を属性および生活実感との関連で見ると本人年齢は30歳以下、従って収入は少いが学歴的には高学歴であり、主人職業は専門的職業、事務的職業であり、生活文化度は高い。4分位では3分位と異なり本人年齢は40～54歳と高く、収入は700万円台と高くなる。主人職業は3分位と同じく、専門的職業あるいは事務的職業となっている。このほかに、対策別分位としあわせ感（現在、過去との比較、将来への期待）をクロスさせた結果は第20表に見る通り、いずれもしあわせであると認識しているものの方が分位は高くなっている。

要するにこれらの結果を総合的に見ると、一概には論ぜられないが、いずれにしても、生活の質的向上をはかるためには、個人の努力はもとより大切ではあるが、自治体、国、あるいは企業への期待は中間階層に強いといえることができる。と同時に生活実感の側面より見るならば、暮らし向きはまずしく、階層意識も低いですが、反面生活文化度が高くしあわせを感じている層に同様の傾向を見ることができるといえる。

3 中産階層における生活の質と生活文化の関連性

本調査では生活文化度と社会属性のクロス分析からは、年齢との相関はほとんど見られなかったが、階層意識と生活文化度の間では、有意の差は見られた。すなわち生活文化度が高まるに従って、上流意識をもつ傾向を見ることができた。また暮らし向きと生活文化度との相関は、階層意識との相関ほど顕著なものを見る

「生活の質」と購買行動に関する一考察（完）

第21表 生活文化度と暮らし向き

暮らし向き 生活文化度	非常に豊か やや豊か	ふ つ う	やや貧しい 非常に貧しい	横パーセント
第1分位（低い）	6 1	83 7	11 7	6
第2分位（やや低い）	17 27	72 40	11 43	37
第3分位（やや高い）	28 47	62 35	10 40	39
第4分位（高い）	30 24	64 18	5 10	18
縦パーセント	23	67	10	100

（上段は横パーセント、下段は縦パーセント）

ことができなかったが、生活文化度が高まれば暮らし向きを豊かと感じる傾向を見ることができる（第21表参照）。

一言でいうならば、生活文化度と属性の関連では、年齢とは余り関係がないが、生活文化は意識の上からも、実生活のうえからも、生活の程度に深い関係をもつ変数であるといえるようだ。（本稿は東海大学教授犬田充氏にご指導を承った。誌面をかりて同氏に謝意を表するものである）